

翻刻・解題 ノートルダム清心女子大学附属図書館 黒川文庫蔵『源氏不審抄出』(下)

著者	伊永 好見
雑誌名	ノートルダム清心女子大学紀要. 外国語・外国文学編, 文化学編, 日本語・日本文学編
巻	38
号	1
ページ	38-52
発行年	2014
URL	http://id.nii.ac.jp/1560/00000135/

紀 要 第三十八卷 第一号（通卷四十九号）三八（五二）（二〇一四）

翻刻・解題 ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵 『源氏不審抄出』（下）

伊 永 好 見

本稿は『ノートルダム清心女子大学紀要』日本語・日本文学編、第三七巻第一号所載「翻刻 ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏不審抄出』（上）」に続く翻刻、解題である。今回は、柏木巻から夢浮橋巻までを翻刻した。凡例は前号を参照されたい。

【翻刻】

●かしは木

右將軍かつか草はしめて青しとうちすさひてそれ
もいとちかき世の事なれは

「四〇オ

天與善人吾不信右將軍墓草初秋これは

時平のおとゝの御弟保忠を右將軍と云へり其
人うせ給し時此詩は作れりそれは秋の事なり
しを今右衛門督の事を思ふに夏なれば草はしめて

青しと紫式部か書かへたり右衛門督から唐名

金吾將軍きんごせいぐんといへは相違なきなりとそそれも近おち

世の事といへる彼保忠やすとむのころ遠からざる故也

此事花鳥にありたゝしこまやかならす或説

「四〇ウ

此詩本来草初青とあり云々未詳可尋之

わか御とかある事はあへなんふたついはんには女のために
こそいとをしけれとおほして色にも出し給はす

かほるむまれしころ女三宮と我御事とを
ならへてかく源氏のおほす心也

●ゆふきり

またしらぬ世かなにくゝめさましと人よりけにおほし
おとすらん身こそいみしけれいかて人にもことはらせん
といはんかたなしとおほしての給へはさすかにいとを
しくもあり

「四一オ

是は夕霧の大将落葉宮を大和守にいひ

あはせて一条の宮にしてその心さしをとけん
とおほしたりしを宮いみしうゝき物におほし
てさらにうちとくへくもおほせさりしことを
なきて少將といふ人にうらみでの給る事也
またしらぬ世かなとはつれなさのたくひなき事
を云へる心也いかて人にもことはらせんとはふたり
の中のことはりを世にとはまほしきの心也

少将これを聞てさすかにいとをしうもあり
とは少将の心也

「四一ウ

けにこそことはけにいつかたにかはよる人侍らんと
すらんとすこしうちわらひぬ

これは夕きりの宮のつれなさを人にことわら
せんといへる心をうけて少将のいへる詞なり
これをことわらせはいつかたにかよる人侍らんと
すらんとは宮と夕きりとを事をいつれこと
わりそとはいはんといふ心也けにといふ詞あまた
ありてまきる、やう也

●みのり

かた／＼におはしましてはあなたにわたらせ給はんも
かたしけなしまいらん事はたわりなくなりにて
侍れはとてしはしはこなたにおはすればあかしの
御方もわたり給て心ふかけにしつまりたる御物語
きこへかはし給ふ

「四二オ

これは中宮をしんでんにてまちきこえ給ひ
ける折ふしの事也あなたにわたらせ給はんも
かたしけなしとは紫上のおはします西のた
いへ中宮のわたらせ給はんはかたしけなしと
云心也まいらん事はたわりなくなりにて侍れは
とは中宮のひかしのたいにましますへければ
そなたへまいらん事もわりなしといへり心ち
のわつらはしきおりの心也

「四二ウ

みときやうなどによりてそれの我御かたにわたり給ふ

御ときやうとは季の御読経の事也此読経しん
てんにてあれば紫上にしのたいへわたり給ふ事也
うす雲との給ひしかとこまやかにて

これはあふひのうへその巻にうせ給ひしとき
源氏君の御ふくの時の哥にかきりあればうす
墨衣浅けれとなみたそ袖をふちとなしける
かきりあればとは法度の事也今紫上のうせ給ふ
時もうす、みなるへけれと心さしの切なるに
よりこまやかに染給へりさるによりうす、みと
の給しかと、はかけり

「四三オ

●まほろし

あちきなのわさやと思ひ給へりしけしきのあはれ
なりしなかに雪ふりたりしあかつきにたち
やすらひて我身もひへいるやうにおほして空の
けしきはけしかりしにいとなつかしうおいらか
なる物から袖のいたうなきぬらし給へりけるを
ひきかくしめてまきはし給へりしほとんどの
よういなどを夜もすから夢にても又いかならん世
にかとおほしつ、けるあけほのにしもさうし
におる、女房なるへしいみしうもつものにける
雪かなといふこゑをき、つけ給へるた、そのおりの
心ちするに御かたはらのさひしさもいふかたなくかなし

「四三ウ

これは女三宮むかへ給ての三日の夜雪ふり
たりし曉帰り給ひける折しも紫の上のすこし
ぬれたる御ひとへの袖を引かくしてうらもなく

なつかしき物からなと侍し事をあかぬ名残の
かなしみにおほし出る心也

「四四〇

三の宮をそさうくしき御なくさめにはおほしませ
させ給ひける母のの給しかはとてたいのまへのこう
はいはいと、りわきてうしろみありき給ふをいと
あはれとみたてまつり給ふ

わか宮まろか桜は咲にけりいかてひさしくちら
さし木のめくりにきちやうをたて、かたひらを
あけすは風もえふきよらしとかしこうおもひ
えたると思ひての給ふかほの

此二の梅さくらの事は二条院にてこの宮に

紫の上のさるへき折はほとけにもたてまつれ

「四四ウ

給へなどの給し事也今かくいへるは六条院にて
紫上の住給し方なれはおほしけるにや

かりかゝし苗代水の絶しより移りし花の影をたにみす

是は紫上うせ給しよりいつちにも立出給ふ事も
なかりしをあかしの上の方へおはして夜ふくる

まて御物語などし給て帰り給ひける朝になくく

も帰りにしかなかりの世はいつもつゐのそこ

よならぬにとよみてつかはし給し返しなり

此哥心得かたくやかしかるしはかりの世とはある

その詞のたよりはかり也苗代水の絶しよりとは

「四五オ

紫上うせ給し心にやうつりし花のかけをたに

みすとはその別より後源氏君あかしのうへにも

かよひたえ給ひし心をかけをたにみすといへる

にや

あふひのかたはらにをきたりけるをよりてとり
給ていかにとかや此名こそわすれにけれとの給へは
さもこそはよるへの水にみ草あめけふのかさしに名
さへわするゝとはちらひてきこゆ

これは紫上の女房中将の君とていとわかき

「四五ウ

か紫上あはれなる物におほしける人なるへし
源氏君も物いひ給ひける人也此人ひるねうち
して侍りけるをあたはらのあふひをとりていか
にそやこの名わすれにけれとは紫上の思ひの
の後中将にも物いひ給ふ心もなかりしをいへる

詞也中将の哥の心けふのかさしに名さへ忘る

といへるをあふ事に心得ぬれはにくゝもなり

侍へしよるへの水にみ草あるとはよるへは

たより也み草あるはあせたる心也紫上うせ給

ひて後はけふのかさしの心をも思ひ入れぬ

ゆへに名さへわするゝといへりなけきの心なるへし」四六オ

定家卿の僻案抄にもよるへの水の事みえたり

雨にそひてさとふく風にとうるも吹まとはして

空くらき心ちするにまとをうつこゑなとすんし

給へるも折からにやいもかかきねにをとなはせま

ほしき御こゑ也

独して聞はかなしき郭公いもかかきねに音なはせはや

此ひき哥にてかける詞なれともいまいへる心は紫上

を、きて源氏のたゝいまのこゑをきかせたて

まつらまほしきの心也

夏の御かたより御心[※]かへの御さうそくたてまつり
たまふとて

「四六ウ

夏衣たちかへてける今日はかりふるき思もす、みやはせぬ

これは紫上うせ給てつきのとし六条院へま

いらせ給ふ哥也ふるき思ひもす、みやはせぬといへる

心紫上の思ひの事といはんも心あたらずまことに

心得かたきにや侍らんとへは此心は紫上の後

六条院の御なけき切なるまゝにいつれのかたゝ

へも思ひたえ給へるころたよりなく心ほそき

さまにおはしますまゝに御さうそくまいらせ

給ふつゐてに我身のことをけふはおほしもやは

いてぬなといへる心にやこの花ちる里は心たてや

すらかに思ふ事なとも哀にの給へる君にて

かくよめるにや侍らん

「四七オ

●匂ふ兵部卿宮

二月に侍従になり給ふ秋右近の中将になりて
御たうはりのかゝゐなとをさへ

このかゝゐは院の御給にて四位になり給ふ事

なるへし侍従もはなれ給はすと竹河にみえたり

十九になり給ふとし三位の宰相にてなを中將も

はなれす

「四七ウ

その、ちのり弓の帰りあるしの時も宰相の

中將とみゆ大かた不審侍らねと此巻紅梅

竹川はし姫椎かもとまて宰相の中將とみゆ

此五卷入みたれてみ分かたきゆへかくしるし
侍る也

●紅梅

その比あせちの大納言ときこゆるはこちしの

おとゝの二郎なりうせ給にし右衛門督のさしつきよ^{にイ}

此巻のうちに源中納言とかほるをいへり昇進

の次第竹河にみゆ夕霧は左大臣にあかり給ふ

この巻のはしめあせちの大納言は右大臣の左大將

なりしかるを此巻に大納言とかける又不審也如何

かよひ給ふ忍ひところおほく八の宮の姫君にも御心

さしあさからていとしけうまうてありき給ふ

これは兵部卿の宮の事也八宮姫君とはなか

の君の事也橋姫のすゑ椎かもとの巻の時分

にあたるへし

●竹河

これは源氏の御そうにもはなれ給へりし後のおほ殿

わたりにありけるわたちのおちとまりのこれる

かとはすかたりしをきたるは

これは源氏の御そうにもはなれとは源氏君

のしそんにあらずといふ心也後の大殿わたりと

は致仕のおとゝの後ひけくろの大殿大臣に

なり給へるをいへり

むらさきのゆかりにはにさんめれとゝは

玉かつらの事をそこにもちてかける詞也其故は

紫上も玉かつらも源氏の御子のやうになりおはし

「四八オ

「四八ウ

ましたりしかれと紫上は後に本たいになり

源氏の恋ひにあひ給ふ事は有しかと

給へり玉かつらもすこし〇うへにはそのよし

「四九オ

みえすしてひけくろのおと、の室になり給へる

事をいはんため也さるによりわるこたちのとはす

かたりしたるはとはいへり紫上に、すとは玉

かつらの事也

源氏の御すゑにひかこと事^{こと}ともまじりて

きこゆるは我よりもとしのかすつもりたりける人の

ひかことにやなとあやしかりける

あやしかりけるといふはいまのわるこたちか

あやしかりけるなるへしいつれかまことならん

とかけるは紫式部か心也この巻のはしめこ、

「四九ウ

までさらに不審のはるけかたき也これまでは

紫式部か我身はか、ぬ事にしなせる詞の也

冷泉院に御子のやうにおほしかしつく四位の侍従

其比十四五はかりにていときひはにおさなかるへき

程よりは心をきておとなしくめやすく人に

まざりたり

これはかほるのゆくすゑをしるし侍らんだめ

先かきいてしるせりこれはかほる中将の巻の

はしめころ也

一夜の月かけははしたなかりしわさかな藏人

の少将の月の光にか、やきたりしけしきもかつら

のかけに侍るにはあらずやありけん雲のうへちかく

「五〇オ

てはさしもみえさりきなとかたり給へは

これはおとこたうかの侍し時四位侍従哥^カの

題にて右のおと、の御子藏人の少将もその

人数にて冷泉院へまいりたりその事をかほる

侍従の院の女房にかたり給ふ詞也月の光に

か、やきたりしとは少将もかたちきよき人也

されとかつらのかけに侍るにはあらずやとはか

つらおとこにはあらずやといふ心也雲のうへ

近くてはさしもみえさりきなといへるその

心みえたり

左大臣うせ給て後右は左藤大納言は左大将かけ

給へる右大臣になり給ふ

うせ給へる左大臣はたれともみえす右は左にとは

夕きりのおと、左にてんし給ふなり藤大納言

左大将かけ給へる右大臣になり給とはこう

はいの巻にいへる大納言事也

此かほる中将は中納言に三位の君は宰相になり

よろこひし給へり

三位の君とはいせんにいへりし藏人の少将の

事也これらはみなこうはいの巻の時分稚か

もとの中ほとにあたるへき歟

御息所もかやうにそおはすへかめる宇治の姫君

の心とまりておほゆるもかうさまなるけはいの

おかしきそかしと思ひ給へり

みやす所とは玉かつらのむすめ冷泉院の

「五一オ

「五〇ウ

御子をうみ給へりしよりかくいへりかやう

にそおはすへかめるといへるはかほるの心也うちの

姫君とはあけまきの大君のことなるへし

左の大殿の宰相の中將大饗の又の日夕つけて

まいり給へり

大饗は夕きりの左大臣に成給へる時のことも

宰相の中將夕つけてまいり給とは玉かつらの

かたへ也心はみやす所にかけそめし心はなれ

すしてなをしたひよる心也

宰相はとかくつれ／＼しく

この巻のはてに何事ともなくかける事

大なる不審也たゝしこれはたゝいまいへる

宰相の中將玉かつらの宮す所をいかに

かなと我思ひの切なる事をつき／＼しく

いひよる心なるへし

●はし姫

御心は御ことつてにてあはれなる御すまひを人

つてにきく事なときこえ給ふて

世をいとふ心は山にかよへとも八重たつ雲を君やへたつる

この哥の心は世をのかれ思ひすましたる人は

うき世の人をはいとふならひなれはその心にて

君やへたつるとよみ給へるにや八重立雲は

物をへたつる物なれはそのえんにて君やへた

つるといはんためにをける詞なるへし

おかしきやうにもまめやかなるさまにも心よせ

「五一ウ

つかうまつり給ふ事みとせはかりになりぬ

これはかほる宇治の宮へちかつきまいり給

としころになる事をいへりしかれは十九

にて宰相の中將に成給ふよしにはふ兵部卿

の巻にみゆ此ころは廿二はかりのとしなるへし

これにつゐて巻のうつりかはる年花鳥の御説

いかゝとみえ侍り

●椎かもと

すひ給るやうに人はきこえなすへかめれと心のそこ

あやしくふかうおはする宮也なをさり事など

の給ふわたりの心かろうてなひなきやすなるなど

をめつらしからぬ物に思ひおとし給ふにやとなん

きく事も侍り

これはかほるのうちの姫君の中君に兵部卿

をあはせたてまつらんとし給ふに心うつりやす

くあた人にておはするよしをあね君のきゝ

をき給てさらにうけひき給はぬをそれを

よく兵部卿の宮の心のそこあたならぬ事を

の給ひしらする詞也心かろうてなひきやす

なるをめつらしからぬ物に思ひおとし給ふとは

宮のさやうの者にこそ御心とまらぬ故に

あたにもみゆれまことにさるへき人にはさや

うにあるましきよしの給へる也

なに事もあるにしたかひて心をたつる方もなく

をとけたる人こそ世のもてなしにしたかひてと

「五二オ

「五三オ

「五三ウ

あるもかゝるものめにみなしすこし心にたかふふ
しあるもいかゝはせんさるへきにそなと思ひなすへ
かめれはなかゝ心なきためしになるやうもあり

「五四オ

この心は世上の人の心かゝるもあるよしを先
いひ出給ふ也たとへは世によく心をきはめて物
しつかなる人にはあらておとけてもうきしたる
物はうちみるところも極心さうにみゆる物也
さやうの人はとあるもかゝる。大方にみなして
たかふふしある時もいかゝはせんちからなしなど
思ひなしてたへぬる人もある物也それはよく
心をきはめたるにてはなくてたゝをとけたる
やうにてよきにはあらずといふ事をの給ひ
いてたる也

「五四ウ

くつれそめてはたつたの川のにこる名をもけ
かしいふかひなく名残なきやうなる事もうちま
しるめり

これもいせんの詞の末也をとけたるものは極心
なるやうにあれとまことに心をさめぬゆへ
に川きしのくつるゝやうに思の外の心も
いてくるといふの儀也これは兵部卿の宮はうへは
あたにみゆれと底ふかくおさめ給へる人なれば
まことにあたゝしき事はあるましきよし
をあね君にかほるのかたり給へる詞也

「五五オ

●あけまき

秋のけしきもしらすかほにあをき枝のかたえ

いとくもみちたるを

同じ枝をわきて染ける山姫にいつれかふかき色とゝははや

此哥はかほる姫君のかたへおはしけるをよくの

かれ給てさしかくれ給へるにそれをもしらて

中の君にその夜ほのかにあひ給て後かほる

より後朝のふみにはあらてあね君の方へ此

哥をつかはし給へりこの心は椎かもとの巻

より此巻にいたるまであまりに姫君の我に

のかれ給るをかこちて兵部卿の宮に御心もひく

やのやうにいひなし給ふ事たひゝ也その心

にておなし枝をとほ宮も我とはかはらぬを宮

に御心そむやといはんとてわきて染ける山姫

にとよめりいつれか御心さしふかゝらんといへる

心也御返事

山姫のそむる心はしらねともうつろふかたやふかきなるらん

この心はかほるのゝ給ふかたをは一向にいはてたゝ

山姫のそむる木葉の色にいひなせりおも

しろくや又説おなし枝をわきてそめけるとは

兄弟の女宮ながら姉君にかほるの心をそめ

けると也いつれかふかき色とゝはゝやとは問給へ

かしの心也返しの心はすてに中君にうつろひ

給ぬれは心さしのふかき方なるへしといひのかれ

給へる心にやと云々但姫君の御心にかやうには

の給ふへくもなくやしからは前の注あるへき歟

こはたの山に馬はいかゝ侍へきいと、物のきこへ

「五六オ

「五五ウ

やさはりところなからんと也

これはこはたの山に馬はあれと、いふ哥にて
かけり心は兵部卿の宮中の君の方へ三日の夜に
をはしさんとおほしたちけれと人めをは、
かりて暮行はかほるの思わひて車など
には所せくにわかにはなとおほして馬にて
もおはしさんやの心也

「五六ウ

世の人のすさましき事にいふなるしはすの月夜
のくもりなくさしいてたるを簾まきあけてみ
給へはむかひの寺のかねの声枕をそはたて、けふ
も暮ぬとかすかなるひ、きをきゝて

是は遺愛寺鐘欝枕聴と云詩の詞と入相の

「五七オ

かねの声ことにけふも暮ぬといふ哥とをもて
かけりむかひの寺のかねのこゑに月のさしいて
たる時節けふも暮ぬと観し給心なるへし
宇治の姫君うせ給てのちつれゝと籠り
給その哀を思つゝけ給折也前の詞にひねも
すになかめくらしとあり不審なくや

●早蕨

中納言殿より御車御せんなど人ゝはかせなど
たてまつれ給ふ

はかなしや霞の衣たちしまに花のひもとくおりもきにけり

「五七ウ

この哥の心は中の君あねみやのふくにてその衣
かへの比いろゝのきぬなどをかほるよりまいらせ
給へる時の哥也時節のほとなき事をいへり花

のひもとくは大方除服の心なから都へいてたまふ
へきいはひの心も侍るへきにや

つれゝのまきはしも世のうきなくさめにも
心と、めてあそひ〇し物をなと心にあまり給へは
みる人も嵐にまよふ山里に昔おほゆる花の香をする
此哥の上句は中の君の我身都へいてたまふ
へきの心也昔おほゆるとは梅の香によそへ
てあね宮の御心を思ひいて給ふ心なるへし

「五八オ

●やとり木

そのころふちつほときこゆるは故左大臣殿の女御に
なんおはしけるまた春宮ときこへさせし時人より
さきにまいり給にしかはむつましく哀なるかた
の御思はことに物し給ふめれと

此女御たれともみえず梅かえに左のおとゝの
御むすめとてれいけいてんと侍しそれにや
名はかはる事なとも侍へきにやこゝにまた春宮
ときこえし時人よりさきにまいり給ふとあり
梅かえに源氏君今の中宮のまいり給ふへき
を、さへて左のおとゝの御むすめをまいらせ
させ給し事人よりさきにといへるにかなへは
もつともうたかひなき物也

「五八ウ

女御夏のころ物のけにわつらひていとはかなくうせ
たまひぬ

是は此藤つほの女御の御事也

御碁なとうたせ給ふ暮行まゝにしくれをかしき

ほとにて花の色も夕はへしたるを御らんして

是は今上かほる中納言と御碁あそはして

菊一枝ゆるすなどの給し比也是は藤つほ

の女御夏の比うせ給ふそのとしの事なるへし

あけまきの大君^のうせ給へる翌年のことなるへき歟

左大臣殿にはいそきたちて八月はかりにときこえ

給ひけり

是は左のおと、の六の君を兵部卿の宮にあはせ

たてまつり給ふへきのさためなりこのころは

うはそくの宮の第三年にあたるへし

この廿日あまりの程は彼近寺かねのこゑもき、

わたさまほしくおほえ侍るをしのひてわたさせ給ひ

てんや

これはうはそくの宮の第三年の法事について

に中君の二条院にてかほるへかくの給ひやる

詞也

思ふやうなる世もあらは人にまさりける心さしの程

しらせたてまつるへき一ふしなんあるたはやすくは

こといつへき事にもあらねは命のみこそなとの給ふ

ほとに

是は二条院にて中君に兵部卿の宮の、給へる

事也此一ふしといへる事あらはにその理

みえずこの心は春宮御位につき給は、兵部卿

の宮を春宮にたてまつらせらるへき

御心うへのおほしける事を心にもちて

「五九オ

しからは我身位にもつき給は、后にも此君をと
おほす宮の御心也

あせちの大納言は我こそかゝるめもみんとおもひ
しかねたのわさやと思ひぬ給へりこの宮の母女御
をそむかし心かけきこえ給ひけるをまいり給て後

もなを思ひはなれぬさまにきこえかよひ給ては

ては宮をえたてまつらんの心つきたりければ御うし

ろみのそむけしきもらし申けれと

これはかほる大納言の女二宮藤のえんのとき

天盃給り給ふをみてこの大納言の我こそとは

思ふ心也この大納言誰ともみえず尋ぬへし

●あつま屋

うこんとて大輔かむすめのさふらふきてかうし

おろしてこゝによりく也あなくらやまたおほ

とのあふらもまいらさりけり

是は兵部卿の宮のうき舟の君をはしめて

二条院にてみそめ給しときの事なりう

きふねの巻にてうこんといひし人もこゝに

ありと兵部卿の御らんしておほしたりし

この人にやさりなからそれにはあらさるへき

かふしんあるによりかきいて侍る物也

は、君たつやといとあはれなるふみをかきてをこせ

たまふ

これはひたちのかみの北方のむすめ浮舟の君を

ひそかなる所にすへて心ほそきすまひを

「六〇オ

「五九ウ

「六〇ウ

「六一オ

思ひやりて文たてまつりし時の事をいへり此
姫君は我むすめなれと八の宮の御子なれば

「六一ウ

わか子のやうに思ふましけれと哀なるやとりの
さまをとひたてまつる時大方の人の母などの
やうに文まいらする心をかくかける也たつとは
やうにといふ心也母君などのやうにとかける
はうやまうへき人の心此詞にてみえ侍るにや

●浮舟

うつちおかしうつれくなりける人のしわざとみえ
たり山たち花つくりてつらぬきそへたる枝に
またふりぬ物にはあれと君かためふかき心にまつとしらなん

これはかほるてならひの宮をうちにをき給

「六二オ

へる方より中の君の御はらのわか君の方へ
まいらせらるゝうつちのさまなり哥の心はまた
ふりぬ物にはあれとゝはまたふりをたち入
てよめる心は我身にまたふれぬ心なりし
ならはぬ事なれと君かためにといふ心也まつ
としらなんとは行すゑのさかへを待と

しれといふ心也もし松の枝などにてまたふり
ををかしくしてうつちにそふる物にやたつぬ

へしなをふれぬ事をふりぬといふへき儀

おほつかなければとも古今の哥にたのめこし言のは
今はかへしてん我みふるれはをき所なしと

「六二ウ

いふ哥はおとこの文をかへすとてよめる哥なり
我身ふるれはとはふるされぬれはといへる心に

よめれはまたふりぬといへるもふれぬといふ心
にかなふへくや

うちつけめかとなをうたかはしきにうこんとなのり
しわかき人もあり

これは兵部卿の宮うき舟の君のかたへはし
めておはして物のひまよりみ給へる時の事
なりうこんとなのりし人とは二条院にて

「六三オ

大輔かむすめのうこんか事なるへししかれ
ともこのうこんは大輔かむすめのうこんにはあら
ざるよし末にかけろふにみゆ如何

山のかたはかすみへたてゝさむきすさきに

たてるかさゝきのすかたもところからはいとおかし

うみゆるに

かさゝきとはからすの事也いまこゝにかける

はつねの鷺の事とみゆかきたかふる事にや

又さきといふへけれと何となくかさゝきといへは

詞のおもしろきこゆれはなすらへて物語の

作者かきけるにやとみゆ如何

「六三ウ

●かけろふ

なかこもりし給はんもいとひんなしいきといきて

立帰らんも心くるしなとおほしわつらふ月たちて

けふそわたらまほしとおほし出給ふ

この月たちてはさ月なるへしつきの詞に

をまへちかき橘の香のなつかしきに郭公の

二声はかり鳴てわたるやとにかよはゝとひとり

こち給ふもあかねはなと侍れはうたかひなき
さ月なりある人不審にいへる事侍れはかくしるし
付侍り

「六四オ

女たにかく心やすくはあらしかしさすかにさるへ
からん事おしへきこえぬへくありやうくみしり
給へるめれはうれしきとの給へは

これはかほる中納言きさいの宮の女房どもの
侍る所におはして我心のあたになきさま
をの給へる詞也

いといらへにく、のみ思ふ中に弁のおもと、てなれ
たるをとなそのむつましく思ひきこゆへき
ゆへなき人のほちきこえ侍らぬやは

「六四ウ

これはわかきとちはかほるの返事をきこへに
く、思ふほとに弁のおもと、いふかはちきこえぬ
やは侍へきといふ事也

物はさこそは中く侍るめれかならすそのゆへ尋ねて
うちとけ御らんせらる、にしも侍らねとかはかり
おもなくつくりそめてける身におはさらんもかた
はらいたくてなるときこゆれは

物はさこそは中く侍るめれとは世にかゝる事
の侍るなりと先いへる心はみなわかき人の
はちて返事せぬを弁はすこしおとなし

「六五オ

き人なればそはにて此返事をいはんは身
にあたらねとこの御かへりを申さてはの心也
それをいはんとてかくおもなくつくりそめて

ける身におはさらんかたはらいたくてとは
いへりこれをはちなく我申事を思ひていふ
詞也なを物はさこそとは人のいふへき事を
そはにていふ事しせん又世にある事なるをかく
いへり

「六五ウ

はつへきゆへあしと思ひさため給ひてけるこそ
くちおしけれなどの給ひつ、
これは弁の君はわかきたくひのやうにはちき
こへかたくてといへるをかほるの我にははつへき
ゆへあらしとの給ふこそくちおしけれと又
の給へる也

さうのこといとなつかしうひきすさふつまをとの
おかしうきこゆ思ひかけぬによりおはしてなと
かくねたましかほにかきならし給ふとの給ふ
にみなおとろかるへかめれとすこしあけたる簾
うちおろしなともせずおきあかりてにるへき
このかみや侍へきといらふるこそ系中将のおもと、か
いひつる也けりまろこそ御は、かたのをちなれと
はかなき事をの給ひて

「六六オ

是は女一宮の女房の琴ひくところへかほる
おはしていへる詞也ねたましかほとは
遊仙囃に女の琴ひくをき、ていへる事

ありけるをいまかほるのよそへていへる也にるへ
きこのかみや侍へきといらふるこそとは同遊

仙囃に容一兒ノ似^カリ舅播一安一仁^カ之外甥氣調ノ如^シ

カホハセハ ヨチニ ハハカタノ ヨイチレハ イキサシハ

兄ノ崔一季一桂カ小妹この詞のうちにこのかみのことし

といふ事とりて中將のおもとにるへきこのかみ

や侍へきといへり心はかほるの北のかたは女一宮の「六六ウ

いもうとにてましませはその心にていへる也又

かほるまろこそ御は、かたのおちなれとの給へ

るは容兒はおちに、たりといふ詞あればまろこそ

御は、かたのおちなれといへりこれは女一宮をか

ほるのあはれとおほす心をこの女房ともその

心をしりていへる時の事也かほるも又その心

あるによりまろこそなどの給へる也時のされ

事ともなるへし

●てならひ

こよひこの人くにかくはれんなどおしからぬ身

なれとれいの心よはきは一はしあやうかりてかへり

たりけんもの、やうにわひしくおほゆ

これは手ならひの君小野にて大尼のふしたる

所にねたまへるときとしりのおそろし

けなるかあまたゐて此君をみやりたる○を

おそろしくおほすときこの事を思いて

給へり一はしあやうかりて帰るとは昔身を

なけんとするもの河をわたるに一はしのあり

けるをわたるかあやうければたちかへりし事

ありと也それをわか身によそへておほす心也

このふる事しるせるものなとはみえすこの物語

に侍るうへはうたかひなき事にこそ此手な

「六七オ

らひの君は宇治川に身をなけし人の

おほえすなからへておはする人も一たひ身を捨し

身のいまこのものにやくはれんとおそろしく

おほす時一はしの事をおほしいてたる也

●夢のうきはし

この人もなくなり給へるさまなからさすかにいき

はかよひておはしければ昔物語に玉殿にをき

たりけん人のたとひを思いて、さやうなる事

にやとめつらしかりて

これはかほる大將よ川にのほり給し時僧都

の手ならひの君の宇治にて物にとられし

を此僧都みつけ給ひし事をかたる詞也玉殿

の事河海花鳥にも此注なし今案仁徳

天皇難波にて春宮をたかひにゆつり給し

時宇治の宮我あればこそとてうせ給ひ

けるに大さ、きの御門おとろきおほして

宇治におはしまし御覽せしにうちの宮

くわんにありなからおき給ひて我はてんめい

なりなどの給ひて又うせ給ひける事をか

けるにや

「六八ウ

「六七ウ

此抄出宗祇法師注也

桑門明融

「六九オ

【解題】

『源氏不審抄出』（『源氏物語不審抄出』）は、連歌師・古典学者として著名な宗祇による『源氏物語』の注釈書^①。

今回翻刻の底本としたノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本（函架番号 黒一、H一―一九六）は、外題、内題ともに「源氏不審抄出」。一冊。縦二四・五cm×横一七・三cm。袋綴。楮紙。墨付丁数は六九丁。一面行数一〇行。墨付一丁の表右上に「藤波家蔵書」、その横に「ノートルダム清心女子大学図書館之印」、「藤波家蔵書」の下に順に「黒川真頼」の朱陽丸印、「黒川真頼蔵書」の朱陽印、「黒川真道蔵書」の朱陽印、真頼の朱陽印の隣に「黒川真前蔵書」の朱陽印がある。巻名の上に朱点を付す。巻末に「此抄出宗祇法師注也 桑門明融」という奥書が付される。

ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵本を除くすべての現存諸本には、宗祇の門弟富小路俊通の「此一冊宗祇法師抄出之所也命下可一覽一由上其後下二向関東一於二相模國一卒去尤可レ嘆而已」かたみともその世にいはぬ心まてふかくなしき筆のあとかな 富小路俊通在判」という奥書が付される。

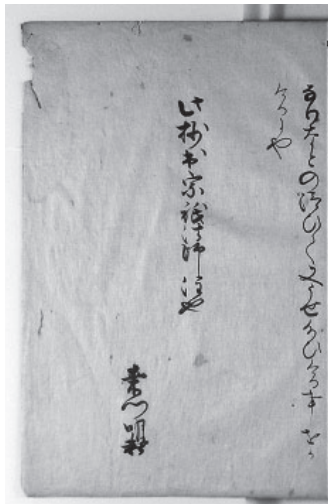
黒川文庫本には俊通の奥書がないのみならず、他本にはない花宴巻の注釈^③があるほか、他本にあり、黒川文庫本にのまない部分や他本と異なる注釈^⑤がある等他本と相違する箇所が散見される。

従来、『源氏物語不審抄出』は、草稿段階があると推測されていたものの、具体的な様相は不明であった。しかし、これらの黒川文庫本の異文に着目することにより、少なくとも黒川文庫本、『一葉抄』所引『源氏物語不審抄出』、俊通奥書本系という本文の変遷を経て

いるらしいことが確認できる^⑥。つまり、黒川文庫本は現存諸本の中で最も古い形態の本文といえ、他本で誤脱した部分を有するとともに、宗祇による注釈の推敲過程も窺い知ることができる貴重な資料といえる。

黒川本には明融が奥書を付す。明融（生年未詳―天正一〇〔一五八二〕）は上冷泉家の冷泉為和の子息で、早くから時宗門徒となり、歌人として活動する一方、古典籍の書写にも注力し、定家筆『源氏物語』の柏木巻を臨模したとされる人物である^⑦。伝明融筆と極められる古典籍は多数あるが、いわゆる明融本『源氏物語』も花散里巻、若菜上巻等、明らかに筆跡の異なる写本もあり、自筆と断定できるものは、署名の残る和歌懷紙以外、ほとんど存在しない。

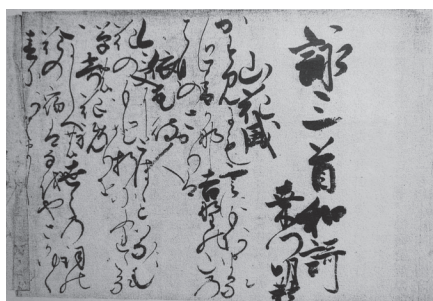
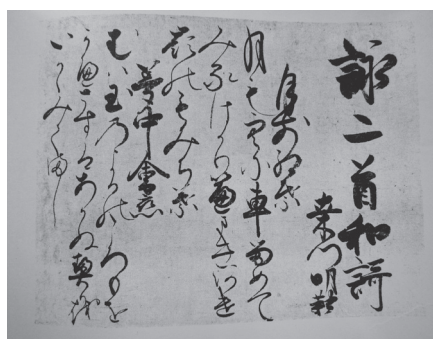
A 黒川文庫本『源氏不審抄出』奥書



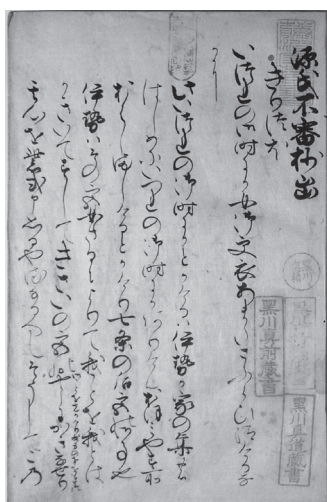
B 明融筆和歌懷紙

①「明融筆和歌懷紙」(古筆学研究所編『過眼墨宝撰集』九、旺文社、一九九四年七月)

②「天正八年三月三日 明融懷紙」(井上宗雄氏「冷泉家の歴史(十二) 為益・明融」)「しられてい」第六二号、一九九七年一〇月)



C 黒川文庫本『源氏不審抄出』本文



Aは、黒川文庫本の奥書、B①、②は明融の署名の残る和歌懷紙である。一見して了解されるように、署名の筆跡が特徴的であり、A、B①、②ともに同筆と判断される。Cに見られるように、『源氏不審抄出』は典籍の書写であり、和歌懷紙とは書き方が異なるためBとの単純な比較はできないものの、署名の一致および、伝明融筆と極められる『源氏物語』のうち複数の巻と同筆と判断されることから、黒川本は明融真筆と判断してよい。黒川文庫蔵『源氏不審抄出』が明融真筆と判断されたことで、今後、伝明融筆の典籍の真贋を判断する上での基準となることが期待される。

注

- (1) 本書には、吉澤義則氏編『未刊国文古注釈大系』第十一卷(清文堂出版、一九六八年六月)に岩瀬文庫本の翻刻、『源氏不審抄出』ノートルダム清心女子大学古典叢書第三期6(福武書店、一九八二年八月)に黒川文庫本の影印と解題がある。
- (2) 本書の現存諸本は、黒川文庫本の他、早稲田大学図書館九曜文庫(甲)本、島原図書館肥前島原松平文庫本、東京都立中央図書館加賀文庫本、東海大学付属図書館桃園文庫本、早稲田大学図書館九曜文庫(乙)本、西尾市岩瀬文庫本、東北大学附属図書館狩野文庫本、天理大学附属天理図書館本の計九本がある。以下、俊通奥書本系の引用は早稲田大学図書館九曜文庫(甲)本による。なお、諸本整理については別稿を用意している。

- (3) 九丁才から九丁ウ(「翻刻ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏不審抄出』(上)」三二頁上段)。

（4）例えば三三丁ウから三三丁オの真木柱巻「けにそこら心くるしけなる事ともを」の注（「翻刻 ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏不審抄出』（上）」四一頁上段）。他本では末尾の「ひけくろの思へる心也」の後に続けて「又いはく心くるしけなることゝもとは玉かつらに心かけし人、の事也心あさき人とはひけくろの事也ほたるのみやいはもるきみなどのやうにはあらて心あさき人といへるにやひけくろにさたまり給へる事也ひけくろの北のかたのことゝには見えざるにや」という注釈がある。

（5）例えば二七丁オ初音巻の注（「翻刻 ノートルダム清心女子大学附属図書館黒川文庫蔵『源氏不審抄出』（上）」三九頁上段）。他本では「是は踏歌の人六条院へもまいりし時御かたゝものみ給ひけるよさうのたいわた殿などに御つほねしつゝ、おはすにしのたいの姫君はしんでんのみなみの御かたにわたり給てこなたの姫君に御たいめんありけりあけぬれはかへりわたり給ふとは物みはてゝの事也（以下略）」という注釈となっている。

（6）詳しくは拙稿「宗祇注の一形成過程―『源氏物語不審抄出』を通して―」（『文学・語学』第二〇三号、全国大学国語国文学会、二〇一二年七月）を参照のこと。

（7）山下真弓氏「明融」（『和歌大辞典』明治書院、一九八六年三月）、石田譲二氏「解題」（東海大学出版会『源氏物語（明融本）Ⅱ』東海大学蔵桃園文庫影印叢書第二巻、一九九〇年七月）

（これなが よしみⅡ 文学研究科 日本語日本文学専攻 博士後期課程三年）

キーワードⅡ 「宗祇」「源氏物語」「注釈書」